

第一言語としての日本語習得研究

— 使用基盤モデルの観点からアイテムベース構文に焦点を当てて —

加 藤 直 子

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）

2013年3月発行 抜刷

第一言語としての日本語習得研究

—使用基盤モデルの観点からアイテムベース構文に焦点を当てて—

加藤直子*

Acquisition of Japanese as a first language

:Focusing on item-based construction from the perspective of Usage-based Model

KATO Naoko

Abstract

The purpose of this article is to explore the process of children acquiring Japanese as first language from the perspective of Usage-based Model. The data is a child's utterances which are collected from her age between 2;0-4;0. "wo", "ga", "ni" and, "de" -constructions are extracted from the data and qualitatively analyzed. According to the analysis, several features are found in her utterance, which are shown as below:

1. The Japanese L1 child began to produce the item-based constructions around age of 2;0.
2. With respect to the "wo" constructions, most of them appeared with omissions of the particle "wo".

These results are consistent to the hypothesis of Tomasello's Usage-based model, which describes the process of L1 acquisition as "item-based construction".

Key words: Usage-based model, quantitative and qualitative analysis, case particles, Tomasello, longitudinal research

1. はじめに

使用基盤モデルとは、Langacker (1988) が提唱した認知言語学の観点からの言語習得モデルであり、言語習得は人間の認知能力によって使用に基づくボトムアップ¹的なプロセスを経て構文² (construction) を構築するという前提に立っている (児玉・野澤 2009)。近年、使用に基づきボトムアップ的に抽象化を遂げると考える使用基盤モデルは、チョムスキーが提唱した生成文法によるトップダウン的な言語習得プロセスとは異なり、血の通った生き生きとした言語習得プロセスが解明されるものとして評価されている (森川 2006)。

使用基盤モデルの観点から行われた研究は主に第一言語としての英語習得 (以下、英語L1習得) を研究対象としているものであり (Tomasello 1992; 2003)、英語とは異なり格助詞があり、統語機能を語順と格助詞によって表す第一言語としての日本語習得 (以下、日本語L1習得) においても妥当なプロセスであるのか検証する余地が残されている。

日本語L1習得における使用基盤モデルの観点からの研究は始まったばかりであるが、使用基盤モデルの観点から日本語L1習得を解明していくことは、これまで生成文法の視点が存在しトップダウン的に捉えられがちで

キーワード：使用基盤モデル，質的研究，格助詞，トマセロ，縦断研究

*平成23年度生 比較社会文化学専攻

あった言語習得の過程（大関 2011）を、ボトムアップ的なプロセスによって新たに読み解くという点で意義深いと考える。

2. 先行研究及び研究課題

2-1 Tomasello (2003) による言語習得プロセス

Langackerの提唱した使用基盤モデルの妥当性を具体的な発話データに基づき実証的な研究に展開させたのがTomasello (1992; 2003) である。彼は自身の娘の1歳前後から2歳までの自然発話を分析し、英語L1習得においては動詞を中心として構文ルールが習得されていくことを示した(Tomasello 1992)。さらにTomasello (2003) では、主に英語を第一言語とする幼児（以下、英語L1幼児）を対象としたデータを分析し、言語習得過程のモデルを示すに至った。Tomasello (2003) が示したモデルでは、言語習得は一語文 (holophrase) ⇒語結合 (word combination) ⇒ピボットスキーマ⇒アイテムベース構文 (item-based construction) ⇒抽象的構文 (abstract construction) というプロセスを経ていくとされている (図1)。



【図1】Tomasello (2003) が示した言語習得プロセス

幼児は1; 0³頃に伝えたいことを一語文によって伝える時期があり、その後1; 6前後で具体的な意味を持つ語と語を結合させる語結合の段階に至り、同時期に結合された語のいずれかにある機能を持たせ、その語をピボットとして発話を行うピボットスキーマの段階を経る。具体的には、1; 0前後に「More」「Milk」といった一語文による発話を始め、1; 6前後で「More milk」と語結合による発話を行うようになる。「More juice」「More milk」「More grapes」などのバリエーションで発話を行う際に抽象化が進み「More + □」というピボットスキーマが生成される。この段階では統語標識 (syntactic marking) は使用されていない。2; 0前後になると、動詞ごとに一定の構文を形成するアイテムベース構文の段階に至る。例えば、cutという動詞なら「cut + 対象物」という構文が形成されるが、他の動詞構文とは関連がなく独立した島のように動詞ごとの構文が存在している状態である。アイテムベース構文の段階は、統語標識を用いて参与者の役割を示すという点でピボットスキーマよりも言語発達段階の上位にあるという。統語標識を用いるということは、参与者の役割を語順や形態素などによって表すことである。その後、3; 0頃に抽象的構文の段階へと進む。Tomasello (2003) は、抽象的構文とは項構造構文であり、アイテムベース構文の一般化であるとしている。具体的には、「X hugs Y」「A kisses B」「M kicks N」という発話を頻繁に聞く中で、アナロジーによってX、A、Mが動作主として「○○する人」、Y、B、Nは目的語として「○○される人」という概念でまとめられる。そして、SVOという抽象的構文を構築する。

膠着言語の日本語においても、L1およびL2において使用基盤モデルの有効性が実証的に示されている（橋本 2006; 2011等）。Tomaselloが提示した語結合、ピボットスキーマ⇒アイテムベース構文へといったプロセスが膠着言語の日本語においても同様にみられることが推測される。

2-2 日本語L1習得の研究

使用基盤モデルについて、日本語のL1習得においては次のような研究がある。

橋本 (2007) は、日本語L1幼児の発話データを分析することにより、動詞の可能形習得が①「できる」のみでの動詞単純形による可能の意味表出⇒②可能動詞の習得開始⇒③「□+reru」というスロット付きスキーマの生成⇒④rareru形式へと発達が進むことを明らかにし、日本語L1習得はスロット付きスキーマというボトムアップ的なルールを最初に獲得し習得が進んで行くことを示した。橋本 (2007) の研究は、日本語L1習得にお

いてもピボットスキーマの発達段階が存在することを実証的に示したものであり、使用基盤モデルが有効であることを明らかにした研究である。

高梨（2009）では、日本語L1幼児の発話データから、動詞「来る」を抽出し、その動詞形習得がどのように発達するのかを使用基盤モデルの観点から分析したものである。結果、動詞「来る」の動詞形習得は初めに一語文の固まりの習得から始まり、一語文においても接尾辞をスロットとしたピボットスキーマが生成され、語結合による二語文の生成の後、二語文においてもピボットスキーマを生成するというモデルを提唱した。

橋本（2007）と高梨（2009）の研究は、使用基盤モデルの観点から日本語L1習得を捉えることにより、日本語L1習得においてピボットスキーマの段階が存在することを明らかにした点で有意義である。

日本語L1習得が固まりによって習得された後に、ピボットスキーマやスロット付きスキーマの生成というスキーマ化を行っていく様子は、日本語L1習得も使用基盤によるボトムアップ的なプロセスを経ていることを示している。

橋本（2007）と高梨（2009）の研究では、日本語L1習得における形態素の習得に注目し、ピボットスキーマの段階があることを明らかにしたものであるが、Tomasello（2003）が示したアイテムベース構文の段階が日本語L1習得において存在するのかは縦断的な研究で明らかになっていなかった。

加藤（2012）では、日本語L1習得において一語文、語結合、ピボットスキーマ、アイテムベース構文の段階が存在するのかを探索したが、アイテムベース構文の基準が明確に設定されていないという問題点があった。2；0前後で格助詞を含む多語文を産出していることは確認できたが、含まれる格助詞は「に」「で」のみであり、統語機能を表すために重要である①参与者を表す「が」、②目的語を表す「を」が含まれる多語文は観察されていなかった。

本論では、日本語L1習得においても、アイテムベース構文の段階が存在するのかを明らかにすることを目的とする。

日本語L1幼児の2；0から4；0までの発話データを分析し、統語機能を表すのに重要と思われる格助詞「が」「を」を含む構文を中心に、アイテムベース構文のプロセスを経ているのかを探索する。以下、研究課題である。

【研究課題】

日本人L1幼児は、アイテムベース構文のプロセスを経ているか。

3. 研究方法

3-1 分析の基準

日本語L1習得においてアイテムベース構文のプロセスを確認するためには、まず日本語の特徴を踏まえた上で、アイテムベース構文の判断基準を明確にする必要がある。

英語の場合は、主に語順に依存した統語標識を用いるという特徴を持っているため、語順が単なるパターン（ピボットスキーマでの産出）なのか、統語標識（アイテムベース構文での産出）なのかは区別しにくい。英語は屈折語であるため代名詞などでは格が明示される。具体的には、Iとmeなどの使い分けができていないか、できていなければピボットスキーマであり、できていればアイテムベース構文であると区別することができる。しかし、日本語ではそれができない。

一方、日本語の場合は、述語が表す事態に関係する人やものは、述語との関係を表す格助詞によって表される（田窪・益岡 2010）が、格助詞が省略されることがあるという特徴を持ち合わせている（久野 1973）。また、日本語L1幼児は4；0までは非常に語順に敏感であり、幼児は語順と格助詞の両方を頼りに発話意味を理解する傾向があり（Clancy 1985）、格助詞の省略はとりわけ幼児期に多い（Clancy 1985、大久保 1967、横山 2008）。

以上の特徴を踏まえると、日本語ではピボットスキーマかアイテムベース構文かの区別は、特に格助詞が省略されている場合は難しい。

そこで、本論では、日本語におけるアイテムベース構文の判断基準を以下の通り設定する。

- I) 名詞と動詞（形容詞構文の場合は形容詞）を含む多語文である
- II) 動詞（形容詞構文の場合は形容詞）に対する名詞の格役割が格助詞によって表されている

発話データから（I）（II）の両者を満たす多語文を抽出し、アイテムベース構文と判断する。但し、日本語の場合幼児期の格助詞の省略が著しいため、考察の際は、格助詞の省略がある発話例における語順の役割についても触れる。

3-2 データ

①研究対象：研究対象は、日本語L1幼児1名（女兒H：2006年8月10日生まれ）とする。

②データ収集方法：家庭内で収集した日本語L1幼児（女兒H）の発話データを収集した。対話の相手となるのは、主にその両親である。妹（2008年6月30日生まれ）との対話場面があるが、女兒Hが2；0から3；0にかけての期間は妹が0歳代であるため発話することはなく、語りかけることに対して妹が喃語で反応することがあった。

データ収集は、主に自宅リビングで行い、テレビ観賞場面を除く場面には、室内での絵本場面、食事場面、おままごとや工作の場面といった日常生活場面が含まれる。母親である著者が観察したい格助詞「を」「が」が産出されやすいような問いかけをするなどの誘導がないように注意を払った。両親の発話を模倣したもの、テレビ・絵本のフレーズ・歌の歌詞の模倣は分析から除いた。

自然発話データは、女兒Hが2；0～4；0までの2年間（2008年8月～2010年8月）、月齢ごと、1回／2週（1回の録音は1時間）を基準にICレコーダーに収めたものである。録音していない場面でも、格助詞を含む発話がなされた場合は、メモに書きとるようにした。女兒Hは第1子であり、生後10カ月から保育園に通っている。収集した自然発話データは収集日の当日、または翌日までに書き起こし文字化した。

3-3 研究方法

女兒Hの発話データからI) 名詞と動詞（形容詞構文の場合は形容詞）を含む多語文であり、なおかつII) 動詞（形容詞構文の場合は形容詞）に対する名詞の格役割が格助詞によって表されている発話を抽出しアイテムベース構文と判断する。また、アイテムベース構文にはどのような特徴があるのか分析する。

4. 研究結果及び考察

女兒Hの発話データから構文を抽出したところ、以下のa)～e)タイプの構文⁴が観察された。以下、それぞれの構文の特徴を述べる。

- a) 自動詞を含む構文：格助詞「が」が自動詞と共起
- b) 他動詞を含む構文：格助詞「を」が他動詞と共起
- c) 存在を表す構文：格助詞「に」と存在動詞が共起（例「～にいる」、「～にある」）
- d) 出来事・動作の場所を表す構文：出来事・動作の場所を表す格助詞「で」が共起
- e) 形容詞を含む構文：格助詞「が」と形容詞が共起（例「～がいい」）

a) 自動詞を含む構文

自動詞と格助詞「が」が共起される構文は、2；0～2；5までは格助詞「が」が共起される発話が少なく、以下の2つのみが観察された（発話例1・2）。

発話例1) 「Tちゃんが 行った」(2；0)

発話例2) 「大きいウサギが ぴよん⁵」(2；2)

2 ; 6以降になると、以下の発話例が確認された（発話例3～6）。

発話例3) 「Hちゃんが やる」(2 ; 6) (2 ; 9)

発話例4) 「誰が やったの？」(2 ; 6) (2 ; 7) (2 ; 9)

発話例5) 「Mちゃんが やるんだったら」(2 ; 6)

発話例6) 「Hちゃんが やってるから 待って」(2 ; 7)

発話例3)～6)からは「参与者+が+やる」という構文が生産的に産出されている様子がうかがえ、動詞「やる」のアイテムベース構文が産出されていると推測される。

また、格助詞「が」が省略されている発話も見られるが、自動詞「来る」は「参与者+が+来る」の語順⁶を保ち産出されていた（発話例7～9）。

発話例7) 「おばけφ来ちゃった」(2 ; 6)

発話例8) 「ママφ来るよ」(2 ; 6)

発話例9) 「怪獣が 来ましたよ」(2 ; 7)

発話例7)～9)において、7)、8)は格助詞の省略があるが、語順が「動作主+来る」となっており、9)と併せると「動作主+が+来る」というアイテムベース構文の生成が推測できる。

b) 他動詞を含む構文

格助詞「を」が他動詞と共起する構文は、2 ; 2に他動詞「半分こする⁷」と共起する発話例（発話例10）、格助詞「を」が省略された発話例（発話例11）が確認された。

発話例10) 「1つを 半分こしてて」(2 ; 2)

発話例11) 「美味しいの 半分こするね」(2 ; 2)

発話例10)・11)では「半分にしたいもの+を+半分こする」という語順を保っており、「半分こする」のアイテムベース構文が生成されているものと推測できる。

格助詞「を」に関しては、省略が多く、「を」格が省略された構文に関しては語順に注目したところ、2 ; 0から「食べる」「飲む」が一定の語順を保ち産出されている様子が観察された。以下、他動詞「食べる」「飲む」が共起される発話例をまとめた（表1・2）。

表1の通り、「食べる」は「食べ物+食べる」という語順を一定に保ち発話を行っていた。語順に関しては周囲からのインプットの影響を受け、「□+食べる」というピボットスキーマの可能性も考えられる。しかしながら、2 ; 8では「食べる人+食べる物+食べる」という語順での発話があり、「参与者+目的語+食べる」の語順を保った発話が見られることから、女兒Hが語順を統語機能として用いたと考えられる。「食べる人+食べる物+食べる」というアイテムベース構文である可能性が高い。

【表1】他動詞「食べる」が共起される発話例一覧（2 ; 0～2 ; 10）

2:0	2:2	2:6	2:7	2:8	2:10
アイス 食べる	1つ 食べますね	これ チーズ 食べれる?	これ 食べてください	Hちゃん もちもち 食べる	これ 食べてください
	1つ これ 食べますね	なに 食べたの?		Hちゃん もちもち 食べたい	
	美味しいの 食べさせて	しっぽ 食べて			

表2の通り、他動詞「飲む」は「飲む物+飲む」という語順で産出されている様子が見られた。

2 ; 7から「飲む」が共起される発話が産出され、「飲む人+飲む物+飲む」の語順を保った発話であった。

【表2】他動詞「飲む」が共起される発話例一覧（2；7～2；10）

2;7	2;8	2;9	2;10
Hちゃん これ 飲みたい	お茶 飲みたい	おっばい 飲んだよ	薬 飲んでください
これ 飲みたい	入っているの 飲みたい	おっばい 飲みたいよ	
お茶 飲みたい	お水 飲んじゃった	おっばい 飲まないよ	
パパ お茶 飲んだ？			
お茶 飲んでごらん			

「飲む人」の後には「が」「は」が省略され、「飲む」の前には「を」が省略されていると思われるが、語順によって参加者の役割を表していることから「飲む人+飲む物+飲む」というアイテムベース構文である可能性が高い。

以上から、他動詞を含む構文は、格助詞「を」が省略されているが、語順によって参加者や目的語を示しているため、アイテムベース構文である可能性が高い。さらに、3；0になると、統語標識が柔軟に使用できる段階に入っていくことが推察された。

他動詞と格助詞「を」が共起される構文においては、女兒Hが入浴後に「ひく（拭く）」⁸を共起させた発話（発話例12）を産出していたが、発話例12）では、「ひいて（拭いて）～を」の語順による産出であった。

発話例12）「タオルで ひいて Hちゃんを（ひいて⇒拭いて）」（3；0）

この現象は、Clancy（1985）が日本語L1幼児は初期には語順に依存するが、統語標識を使用できるようになると、語順が緩やかになっていく傾向があると述べている点と一致する。おそらく、統語標識として格助詞「を」を適切に使用できるようになり、「N（目的語）・格助詞「を」・「他動詞」が共起されるが、語順を入れ替えることができるようになったものと考えられる。このことは、女兒Hが統語機能として格助詞「を」を明確に認識している表れと考えられる。

c) 存在を表す構文

発話データから、格助詞「に」と存在動詞である「ある」「いる」が共起される構文が抽出された。以下、発話例を挙げる（発話例13～15）

発話例13）「スプーの島に いますね」（2；2）[テレビのキャラクターであるスプーが
スプー島にいるという意味]⁹

発話例14）「香港は 左側に あります」（2；7）

発話例15）「こんなところに いますよ」（2；8）

「ある」「いる」が格助詞「に」と共起される発話は2；2から観察された。発話例13）～15）はすべて「(場所)+に+いるorある」の産出になっており、アイテムベース構文の形式を成している。但し、「にある」「にいる」は固まりでの使用や「□+にある」「□+にいる」というピボットスキーマでの産出の可能性もある。

d) 出来事・動作の場所を表す構文

出来事・動作の場所を表す格助詞「で」が共起する以下の発話も観察された（発話例16～20）。

発話例16）「これ どこで 描いたの？」（2；6）

発話例17）「下で 座って やる」（2；8）

発話例18）「どこで やってきた？」（2；9）

発話例19）「アンパンマンたち どこで 寝るの？」（3；1）

発話例20）「どこで 買ったの？」（3；1）

発話例16）～20）では、「場所+で+動詞」形式の産出が多くみられたが、そのほとんどが「どこで」という

表現を含むものであった。2；0以前の発話でも「どこで？」という一語文での産出がなされていることが確認できたため、「どこで+動詞」という固まりで使用されている可能性がある。

e) 形容詞を含む構文

格助詞「が」が共起される形容詞構文が発話データから抽出された（発話例21～25）。

発話例21)「おんぶがいいの？」(2；7)

発話例22)「りんごちゃんが すごいな」(3；0)

発話例23)「どんな たいこが いい？」(3；7)

発話例24)「これが いい」(3；9)

発話例25)「ピンクが いいよ」(4；0)

発話例21)～25)の通り、形容詞を含む構文は「～がいい」という形式が圧倒的に多い。「N+が+いい」というアイテムベース構文の体を成しているが、「～がいい」という固まりでの産出の可能性はある。

発話例13)～25)の発話例からは、アイテムベース構文の体を成している構文の場合であっても、固まりによる産出の可能性のあるものが見られた。

5. 総合考察及び今後の課題

日本語L1習得は、アイテムベース構文の段階を経ているかを確認するために、日本語L1幼児（女兒H）1名の発話データを分析した。その結果、女兒Hの発話データにおいては、限られた動詞ではあるが、動詞「やる」「来る」「半分こする」のアイテムベース構文が確認された。動詞「食べる」「飲む」に関しては格助詞が省略されているが、「食べる人+食べ物+食べる」「飲む人+飲む物+飲む」の語順によって参与者である「食べる人」「飲む人」と目的語である「食べる物」「飲む物」を表していると考えられ、アイテムベース構文である可能性が高い。

Tomasello (2003) が2；0以降にアイテムベース構文の段階に至るというプロセスを提唱したが、女兒Hの発話データからは、僅かな動詞であるがアイテムベース構文を確認できたため、日本語L1習得においてもアイテムベース構文の段階を経るものと思われる。

本論は、日本人L1幼児1名の僅かな発話データから考察したものであり、一般化することは難しい。複数の日本語L1幼児の発話データを場面設定を厳格にした上で収集し、周囲からのインプットや発話における誤用を考慮した上で分析する必要があると思われる。その点は、今後の課題としたい。

【註】

1. ボトムアップとは、具体的な発話事例から文法を抽出していくことである。
2. 構文とは、意味のある言語記号であり、コミュニケーションの場において使用されるパターンのことである（Tomasello 2003）。
3. 年齢は（年；月）で示す。（1；0）は1歳0ヶ月を、（1；6）は1歳6ヶ月を表す。
4. 分類に関しては、田窪・益岡（2010）の基準を参考にした。
5. 幼児の場合、オノマトペが動詞のように使用される場合がある（大竹 2011）。
6. 両親の発話においても「パパが来たよ」「Mちゃん来てくれるって」という発話が見られたことから、語順に関してはインプットの影響を受けている可能性が考えられるが、発話内で共起される動詞・名詞は女兒Hが場面に合わせて選択し産出しているものであるため生産性のある自発的な発話と判断した。
7. 「半分こする」という表現は「～を～にする」という表現の短縮形とも考えられるが、あるものを半分こにする動作そのものを「半分こする」と表していることから、女兒Hが「半分こする」という他動詞として用いているものと判断した。
8. 女兒Hは、タオルで体を「拭く」ことを「ひく」と言い間違えることがあった。
9. [] 内は、発話意図の補足説明である。

【参考文献一覧】

- Clancy, Patricia, M. (1985) *The Acquisition of Japanese*. In *The Cross linguistic Study of Language Acquisition* (vol.1), I.D. Slobin (ed) Lawrence Erlbaum Associates Publishers. Hillsdale; New Jersey.
- Langacker, Ronald W. (1988) A usage-based model. In Brigada Rudzka-Ostyn, eds., *Topics in Cognitive Linguistics*.
- Tomasello, M (1992) *First verbs: A case study of early grammatical development*. New York: Cambridge University Press.
- (2003) *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*, Cambridge, MA: Harvard University Press. (辻 幸夫ら訳 2008 『ことばをつくる—言語習得の認知言語学的アプローチ』慶應義塾大学出版会株式会社)
- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂出版
- 大関浩美 (2011) 「第一言語習得研究と第二言語習得研究の動向」『日本語学』30 : pp16-27. 明治書院
- 大竹裕香 (2011) 「幼児におけるオノマトペと動作イメージの結びつきの発達」『日本認知科学会大会発表論文集』28 : pp3-26.
- 加藤直子 (2012) 「使用基盤モデルの観点からの第一言語としての日本語習得」『日本認知言語学会論文集』12 : pp564-569.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 高梨美穂 (2009) 「日本語動詞形の習得順序—使用依拠 (Usage-based approach) の観点から—」『言語情報科学』7 : pp33-50.
- 田窪行則・益岡隆志 (2010) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 橋本ゆかり (2006) 「幼児の第二言語としての動詞形の習得プロセス—スキーマ生成に基づく言語構造の発達」『第二言語としての日本語の習得研究』9 : pp23-41.
- (2007) 「幼児の第二言語としてのスキーマ生成に基づく言語構造の発達—第一言語における可能形習得との比較—」『第二言語としての日本語の習得研究』10 : pp28-48.
- (2011) 『普遍性と可変性に基づく言語構造の構築メカニズム—用法基盤モデルから見た日本語文法における第一言語と第二言語習得の異同—』風間書房
- 森川尋美 (2006) 「孤島から文法の大陸へ—形態沿う語獲得の使用基盤モデルに関する理論的背景と書研究—」『心理学評論』49 : pp96-109.
- 児玉一宏・野澤元著・山梨正明編 (2009) 『言語習得と用法基盤モデル』研究社
- 横山正幸 (2008) 「文法の獲得〈2〉—助詞を中心に—」『新・子どもたちの言語獲得』pp141-164. 大修館書店